

# 野外教育と体育に関する教育的事例研究

佐藤 陽治<sup>1)</sup>

## The Pedagogical Case Study on the Physical Education in the Field of Outdoor Education.

Yoji Sato<sup>1)</sup>

- 1) 学習院大学スポーツ・健康科学センター
- 1) Centre for Sport and Health Sciences, Gakushuin University.

Key word : outdoor education, adventure education, the worth of life, volunteer activity

### Abstract

This paper throws the light on the roles of physical education to outdoor education. The significances of outdoor education are from five educational activities and contents. Those were shown by G. & A. Donaldson and H. Yoshinaga as follows.

- 1) Education in outdoor
- 2) Education about outdoor
- 3) Education for outdoor
- 4) Education by outdoor
- 5) Adventure education

Physical education wholly gratifies those significances, especially education by outdoor and adventure education. Adventure education, one of outdoor education, is almost always combined with some physical activities. Therefore, adventure education has the greatest impact among the contents of outdoor education. Adventure education influences the mental situation from a feeling of satisfaction at having achieved and so forth, and leads to the realization of the worth of humanlike activities and the worth of life, and more enhances the human power to live and so on.

It has been said that we have the three worth of life. One is to be impressed with the beauties around us, like paintings, music, sunset view, one little flower on the corner of field, a way of life that I would have lived and so forth. Beauties surround us and Earth is filled with beautiful things. Second is the worth of creativity like to pain, to compose music, to curve the metal, physical challenging to enhance the mental situation, to do sport to change mental and physical situation. To challenge to change the mental situation is included in the creativity in a sense of creating new mental situation. And the last worth of life is humanity or to have the enjoyment of behavior like human. Sympathy, Compassion, Friendship, Cooperativeness to others, Volunteer activity and so forth are gifted characteristics of humanity. Outdoor education has a lot of opportunity and possibility to develop those three worth of life in men.

In this paper some case studies on the outdoor education are reported as example. Adventure education of cycling tour, trekking tour, camping and some volunteer activities are followed and reviewed here.

## 第1章 野外教育の意義

野外教育 (Outdoor Education) は体育に限らず、全教科に共通する一つの教育方法である。Donaldson (Donaldson) は、野外教育の具体的内容として、「野外における教育 (in outdoor)」、「野外についての教育 (about outdoor)」、「野外のための教育 (for outdoor)」を挙げ、吉永<sup>1)</sup>はさらに、「野外による教育 (by outdoor)」と「冒険教育 (adventure Education)」を加えて野外教育の定義としている。「野外における教育」では屋外の自然環境を教室として行うことにより五感が研ぎ澄まされ直接的な体験が感受性を豊かにするという効果が期待されている。「野外についての教育」では、自然環境自体を教材として扱うことにより知識を体験により知恵に変えてゆくことになる。自然は図工、音楽、美術など創造的分野ではもちろんのこと、理科や社会、あるいは国語、数学と言ったあらゆる分野で活用出来る教材を提供する。「野外のための教育」は、キャンプ生活に代表されるような野外を楽しむためのレクリエーション技術の学習である。余暇の価値、活用の必要性という根本的な問題に始まり、自然環境を利用し守るためのマナーなども教育内容に含まれてくる。高度経済成長した日本で、余暇の活用は人の生きがいに通じる精神的な高揚を生む契機となりうる命題である。「野外による教育」では、野外での共

同生活、集団行動などを通して、協力、責任、正義、友情、奉仕、労働の価値など人間社会で必要な価値を体験させたり、人間性を高揚させることが目的となろう。「冒険教育」では、刻一刻と変わる環境で次々と訪れる予期せぬ困難や課題など文字通り危険性を伴う環境の中で自己の限界に挑戦したり、困難な課題を克服したりする活動の中で、好奇心、自主性、創造性、連帯感などが刺戟される。人も自然の中で生かされているという価値観は人生をよりよい望むべき方向へ導くきっかけとなろう。「Table 1」に野外教育の意義、目的、内容をまとめた。

体育は「野外による教育」及び「冒険教育」を骨子に上記の野外教育の五つの定義、すべてに該当する。従来、キャンプ活動の一環として野外教育は捉えられがちであるが、理念は逆であり、野外教育の一つの方法としてキャンプは至適内容で意義に合致する。サイクリング、カヌーなど非日常的活動量を伴う冒険教育は、心身ともに極限のストレスとチャレンジを必要とされる場面が想定されることから、心理的高揚は大きく、得られた達成感後の人生に自主性、積極性、そして自信を与えるに違いない。自然を相手に摂生した生活、活動は生(活)きるために必要なもの以外はそぎ落とし、シンプルで怠惰のない望むべき人生観を垣間見せるであろう。

Table 1 野外教育の意義、目的、内容

野外教育の定義	目的	内容
1 野外における教育	五感での体験学習、感受性の発達	天然自然が教材、教室
2 野外についての教育	知識を体験を通して知恵に変える	各分野の教材を自然に求める
3 野外のための教育	余暇の価値学習、野外活動の享受	野外を活用する技術、マナー
4 野外による教育	人間的諸価値の理解、個人的成長	野外生活、活動、キャンプ
5 冒険教育	自己概念の拡張(自主性、創造性、信頼感)	サイクリング、カヌー、登山など

## 第2章

### 人生の価値（生きがい）と野外教育

平成20年3月、文部科学省は学校教育法施行規則の一部改正と学習指導要領の改訂を行った。新学習指導要領では、改正で明確となった教育の理念を踏まえ、特に体育科に関しては、「生きる力」の育成、道徳教育や体育などの充実により、豊かな心と健やかな体を育成することなどがねらいとなった。

人間の生きる意味、人生の価値、人生を彩る要因は三つあると言われる。「美しさへの感動」、「創造的価値」、「人間らしさの味わい」である。音楽、絵画など芸術作品を鑑賞する、夕日、滝、河川、湖沼など大自然に触れて鳥肌の立つような感動を味わう、人の生きざま振舞いに接して美を感じそうありたいと思う、ふと気付く野辺に咲く一輪の花、美しさをも伴うスポーツシーンの数々……世の中は美しいものに溢れており、それに気付く感性を持つことは人生を彩り精神の高揚を招く。「創造的価値」には、絵画、小説、彫金、クラフト、発明、工夫などの創作、創造活動の他に、自分の限界に挑戦する行為、意欲、行動など自己改革の要素も含まれる。アマチュア精神の骨子であるスポーツ活動での自己の限界の限らない追及姿勢などは、心身の活動も伴う適切な例である。挑戦することから惹起される達成感などは、「人間らしさの味わい」に含まれる。挨拶、感謝の念を伝える、集団生活で観察される協力、協調、連帯感、友情などの対人だからこその感情、ヒューマン性の発露としての各種ボランティア活動など、人は一人では生きられないという条理から解放されない以上、人と人との関係は人生を価値あり実りあるもの、より良き方向性に導くのに欠くことのできないものである。

生きる力とは、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である……。たくましく生きるための健康や体力が不可欠である……。」(文部省(現文部科学省)、1996年)と定義されている。野外教育はこの生きる力を豊穡するのに著しく合致し、生きがいの創生につながる価値ある教育である。

## 第3章

### 生きる力の創生を目指した野外3授業 (サイクリング・キャンプ・トレッキング)

#### 1 本学の野外教育の変遷

大学設置基準の大綱化に伴う一般教育課程のカリキュラム改革の流れの中、本学の体育授業も新たな展開を余儀なくされた。「大学における体育教育の本来の目的の明瞭化と意識改革」は、必修科目として安寧に守られてきた体育教育を革新、活性化するためには必要不可欠な潮流となり様々な改革、刷新が図られることとなった。

大学体育は、「健康」と「運動(身体活動、スポーツ等)」を広く、人文科学的にも自然科学的にも扱う分野であることの再確認の下、体育教育を運営する組織母体であった「体育科」は「スポーツ・健康科学センター」と公式に名称を変え、カリキュラムとしても、全学1・2年次必修通年各1単位であった体育科目は、スポーツ・健康科学科目と改名し、各学部学科の自主判断により、必修及び選択科目としての多面に渡る展開が図られることとなった(「Table 2」)。また、各カテゴリーにおける教育目的の明確化と統合も図られることとなり、守りの教育から脱却し、攻めの教育に転換していくこととなる。

Table 2 スポーツ・健康科学科目（旧体育科目）のカテゴリー

カテゴリー	対象学部	必修・選択	履修期間	単位数
スポーツ・健康科学Ⅰ	文学部・理学部1年次	必修	通年	2
スポーツ・健康科学Ⅱ	理学部2年次	必修	通年	2
スポーツ・健康科学Ⅲa	全学部	選択	半期	1
スポーツ・健康科学Ⅲb	全学部	選択	集中	1
スポーツ・健康科学特別演習	全学部	選択	集中	2

スポーツ・健康科学Ⅰの教育目的は、「身体活動（運動・スポーツ）を通して健康・体力への理解・維持・増進を図る」であり、スポーツ・健康科学Ⅱ、Ⅲ a、Ⅲ b、特別演習の目的は、「各担当教員の授業目標で展開される授業」と総記され、特にⅢ a、Ⅲ b、特別演習において教員各自の体育哲学に基づいた教育が展開されることとなった。

このような本学の体育改革の潮流の中、スポー

ツ中心の教育に留まらない、時代に即した、より多面的な体育教育の可能性が模索され、キャンプ、サイクリング、アウトドアスポーツ（トレッキング・ハイキング）など「野外活動を通じた自然との共生体験及び自己啓発と生きる力の創生」という総合的目標（「Table 3」）をもった野外教育が誕生する。

Table 3 野外教育の教育的価値

野外教育の目的	自己・仲間・社会・自然に対する態度の望ましい変容を導く
目標 1	生きる力を育む。人間的諸価値への目覚め
目標 2	自己実現に通ずる余暇の創造的活用の価値の認識及び方法の学習
目標 3	自然との共存を目指す自然観の確立

注)「野外教育の理論と実際」(永吉宏英) より、内容を表化

## 2 野外教育の実績

### 1. 野外教育3教科（サイクリング、トレッキング、キャンプ）

サイクリング、キャンプ、アウトドアスポーツ（トレッキング／ハイキング）のいずれも自然と共生した活動であり、限界への挑戦を目指したプログラムの基、3泊4日の行程で実施される。サイクリングはツアー型であり、「自己能力の限界への挑戦」、キャンプは定住型で、「仲間とのコミュニケーション、人間も自然の一部であることへの気付き（共生）、美しさへの感動」、アウトドアスポーツ（トレッキング／ハイキング）はツアー型で、「自然の美しさに触れ生かされている自分に

気付く、自己を見つめなおす」などが、主要な目標となって展開される。

サイクリングとキャンプは1996年の夏、アウトドアスポーツは1998年の夏から毎年実施されており、2012年現在、履修者及び参加者の合計数は、サイクリングが571名、キャンプが301名、アウトドアスポーツが235名である（「Table 4」）。

サイクリングの実習地は、第1回（1996年）の八幡平周辺を除き、第2回目以後は、若狭湾岸縦走、能登半島一周、紀伊半島縦走、奥会津－裏磐梯縦走の各コースを基本的に順繰りに実習地としている。キャンプは、第1回（1996年）の奥日光光徳を除き、八ヶ岳山麓海尻稲子で実施している。

Table 4 野外三教育の履修者及び参加者数

野外三教育	Staff	学生	f-campus	教職員	OB/OG	計
サイクリング	55(11)	370(187)	58(37)	53(14)	35(14)	571(263)
キャンプ	34(14)	241(112)	13(8)	7(4)	6(0)	301(138)
トレッキング 他	41(7)	159(91)	18(16)	11(7)	6(1)	235(122)
計	130(32)	770(390)	89(61)	71(25)	47(15)	1,107(523)

注) ( ) 内は内分け女子。f-campusは五大学交流学生。キャンプ、サイクリングは1996年から、トレッキング他は1997年から実施。2007年サイクリング、トレッキング休講、2006年トレッキング休講、キャンプは2005年までのデータ。従ってサイクリングは16年分、ハイキングは13年分、キャンプは12年分のデータである。三教育とも2000年から2005年まで大学教育高度化推進特別経費「高等教育研究改革推進経費」の補助金対象となる。

アウトドアスポーツは、尾瀬、奥日光、奥鬼怒、奥入瀬溪流、八幡平、裏磐梯などで実施している(実習地一覧：Table 5)。

サイクリングは冒険教育的意味が強い。宿を転々と変えるツアー式のため天候に関わらず移動する、初参加の学生にとっては初めての道のりな

のでいつ終わる(終点に到達する)ともわからない精神的ストレス、道の状況が変わり迂回せざるをえないなどのハプニング遭遇、班別にルート取りをする楽しさと冒険、登坂の苦とダウンヒルの快適など精神的、身体的ストレスの振幅の大きさとその繰り返し、そしてやがて訪れる達成感と満

Table 5 野外教育の実習地一覧

年	サイクリング	トレッキング	キャンプ
1996	岩手県、秋田県八幡平周辺	未開講	(奥日光光徳)
1997	能登半島一周：鶴川－羽咋	尾瀬(片品)*	(八ヶ岳山麓海尻稲子)
1998	紀伊半島縦走：明日香－串本	裏磐梯*	八ヶ岳山麓海尻稲子*
1999	桜枝岐－新潟：只見川沿い	奥日光－霧降高原*	八ヶ岳山麓海尻稲子*
2000	若狭湾：三方五胡－天ノ橋立	奥日光*	八ヶ岳山麓海尻稲子*
2001	能登半島一周：富来－九十九湾	奥入瀬－十和田－八幡平*	八ヶ岳山麓海尻稲子*
2002	紀伊半島縦走：吉野－	尾瀬(御池－片品)*	八ヶ岳山麓海尻稲子*
2003	桜枝岐－喜多方－裏磐梯	蔵王高原(宮城－山形)*	八ヶ岳山麓海尻稲子*
2004	若狭湾：天ノ橋立－三方五胡	奥日光－丸沼－奥鬼怒	八ヶ岳山麓海尻稲子*
2005	能登半島一周：富来－九十九湾	(尾瀬：片品)	奥日光光徳
2006	紀伊半島縦走：明日香－勝浦	休講	(奥日光光徳)
2007	休講	休講	(奥日光光徳)
2008	能登半島一周：富来－九十九湾	奥日光－丸沼－奥鬼怒	(奥日光光徳)
2009	若狭湾：天ノ橋立－三方五胡	那須高原－三斗小屋	(奥日光光徳)
2010	能登半島：奥能登周辺	奥入瀬－十和田－八幡平	(奥日光光徳)
2011	紀伊半島縦走：明日香－勝浦	奥日光－丸沼－奥鬼怒	(奥日光光徳)
2012	桜枝岐－喜多方－裏磐梯[予定]	那須高原－三斗小屋[予定]	(奥日光光徳)[予定]

注) ( ) は担当せず。\*以外は主担当。

足、自己信頼、仲間との絆の強化など人間らしさの味わいなど生きがい創造に通ずる教育効果がある。ちなみにルートによっては体力に自信のある受講者を0班と称して募集し、冒険的ルートに挑戦するチームを形成したりしている。能登コースの門前から猿山灯台をへて大沢へ抜けるルート、若狭湾コースでの越坂から入江に抜けるルート及び初期の三方から海岸線に抜けるルートなどである。サイクリングでは、学生に対する教育的意義に共感し、教職員、卒業生の特別参加が多いなど、野外教育の教育意義の結実が具現しており、1999年以降、履修学生が記念文集(「Ref.1」)を毎年創るなど、特に盛況を呈している。トレッキングも「奥日光-丸沼-奥鬼怒」コースでは、丸沼から奥鬼怒に抜けるコースは歩く人がほとんどいないのか倒木、失路が多く冒険的意味合いが強い、那須高原-三斗小屋コースも歩かなくては行けない難コースである。

尚、この野外三授業はその教育的価値が認められ、2000年度より5年間、文部科学省大学教育高

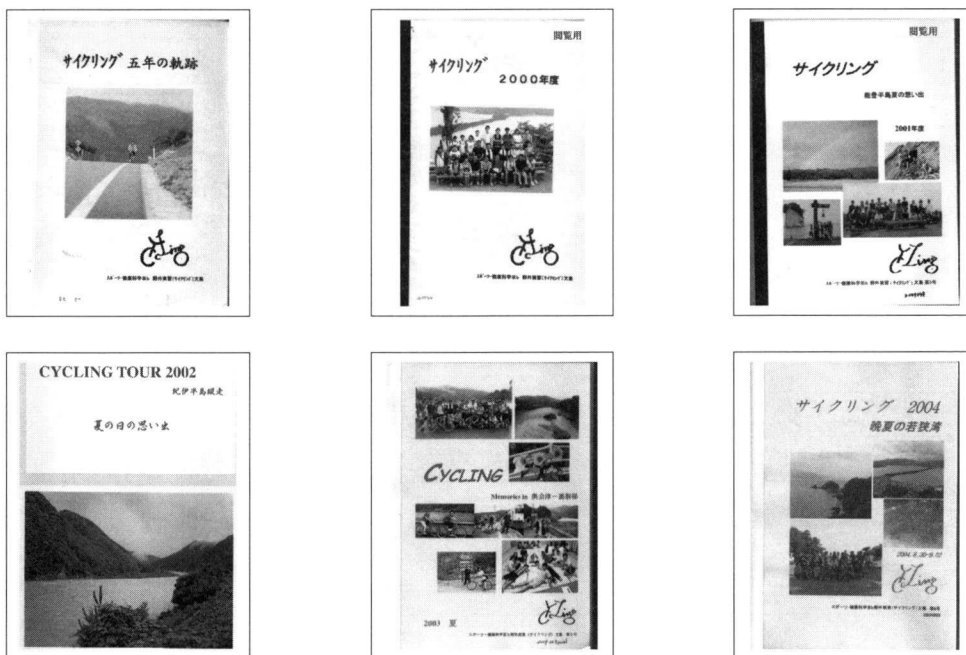
度化推進特別経費「高等教育研究改革推進経費」の補助金対象となっている。

## 2. 野外教育 (プール・エクササイズ)

2003年と2004年に学習院大学新規重点施策戦略枠予算で「スポーツ・健康科学特別演習(プールエクササイズ)」を企画し実施した。

プールを使った新しいコンセプトのパイロット授業である。8月の夏季休暇に集中授業、2単位で佐久平の温泉プールを中心に3泊4日で活動をした。大自然の環境の中でのウォーキング、温泉プールでの身体活動、食事管理、健康に関する講義などを通して、学生の生活習慣の改善、心理的状況の改善などを目論んだ生活介入授業である。

「Fig.1」に授業の日程と内容を示した。授業効果の実証の為、授業の事前事後に各種アンケート調査(POMSなど)、採血による血液組成検査(HDLコレステロールなど)を実施し好結果が得られた。2回の開催のべ人数は50余名であった。2005年は計算機センター7特別研究費の補助を受け研究事業として実施した。



Ref.1 野外教育(サイクリング)授業における教育効果の結実(自主的文集作成)

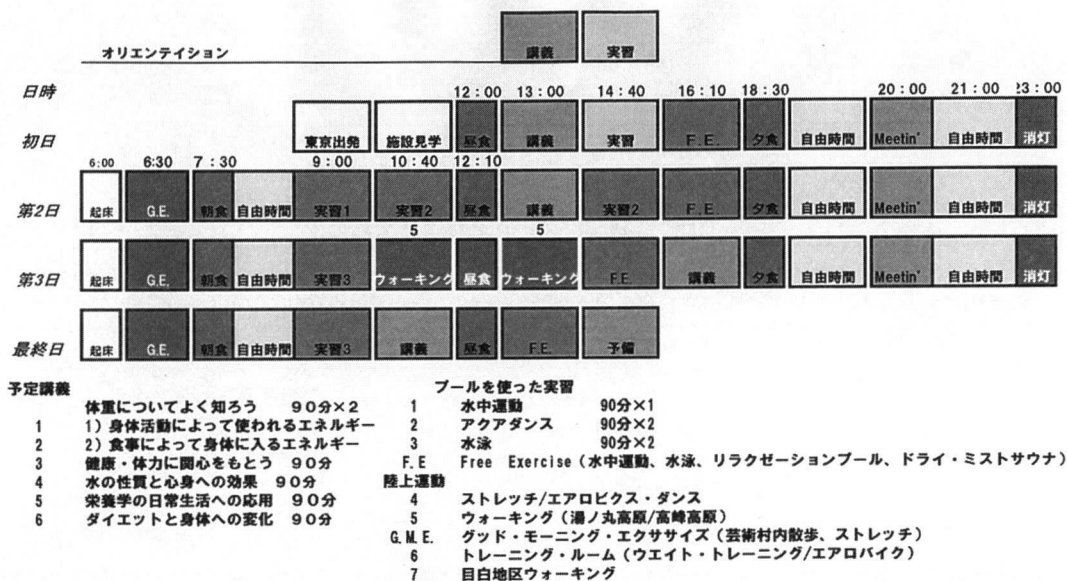


Fig.1 短期集中型の総合的健康教育介入プログラム

### 3. 野外教育(第1回学習院元気プロジェクト —サハリンでサイクリングと学生交流—)

2008年8月、学校法人学習院教育企画として発足した「学習院元気プロジェクト2009」を実施した。学生の自己啓発、生きる力の創生、達成感、連帯感など人間性の高揚、現地学生との国際交流を目指してロシア共和国サハリンを9泊10日で訪問した。稚内よりフェリーでコルサコフ(大泊)に渡り、ユジノサハリンスク(豊原)を起点にホルムスク(真岡)、オホーツクコエ(富内)、ブズモリーエ(白浦)、ドリンスク(落合)、ネベリスク(本斗)などを訪問した。活動内容は主要活動である200kmに及ぶサイクリング、現地サハリン大学日本語学科の学生との交流、在留日本人の方々との面談、日本統治時代の関連遺物、遺史跡の確認などであった。

## 第4章

### 野外教育としてのボランティア活動の実績

第2章で触れたように、ボランティア活動も野

外教育の重要な一部を担う。人生の生きる価値の一つであるヒューマニティーに裏打ちされた行動の極みがボランティア活動といえようか。ボランティア活動の教育的要点はボランティア活動は人のためではなく自分のために行っているという認識と自覚である。「Table 6」にボランティア活動関連の活動一覧を示した。

### 1 GONGOVA(Gakushuin Overseas NGO Volunteer Activity)関連

#### a) 第13回 GONGOVA 2009-X & 2009-Y

2009年3月1日から17日までタイ王国山峡のバン・フェイケオボン村(白カレン族)

でワタノキの活着調査、熱帯雨林内の防火帯整備及び水資源管理に寄与する簡易チェックダムの建設、隣接のバン・ホエチャンレック村で小学校校舎の増築、簡易水道設備の修復、及び取水源調査、バン・フェイヒンラートナイ村(白カレン族)でフォレスト・カレンダー森林環境教育プロジェクト、樹木の植栽試験・樹種選抜試験プロジェクト、

Table 6 ボランティア活動関連の活動一覧

活動名	期間	場所	学生数(他)
GONGOVA <sup>1)</sup> 2009 X&Y	2009.3.1-19	タイ王国 バンホエケアボン他	
GONGOVA <sup>1)</sup> 2009	2009.8.2-13	タイ王国 バンホエヒンラートナイ他	
GGプロジェクト <sup>2)</sup> 2008	2008.8.4-13	サハリン (樺太)	13 (5)
GGGプロジェクト <sup>3)</sup> 2009	2009.8.14-23	小笠原諸島父島	17 (7)
GGGプロジェクト <sup>3)</sup> 2010	2010.8.7-23	中国内モンゴル自治区	22 (5)
GGGプロジェクト <sup>3)</sup> 2011 <sup>4)</sup>	2011.8.8-22	中国内モンゴル自治区	30 (6)
学習院東日本大震災復興支援	2011.7.17-23	久慈、野田、宮古	65 (10)

1) Gakushuin Overseas NGO Volunteer Activity (学習院海外 NGO ボランティア活動)

2) Gakushuin Genki Project (学習院元気プロジェクト)

3) Gakushuin Green Genki Project (学習院グリーン元気プロジェクト)

4) 経営学特殊講義(集中2単位)

及び熱帯養蜂農業導入プロジェクトに対するフォローアップ作業を実施した。山村滞在期間は3月2日から9日であった。バン・フェイケオボン村は41戸、人口180名、バン・ホエチャンレック村は35戸、人口130名、バン・フェイヒンラートナイ村は21戸、人口95名であった。引率教員は川嶋辰彦経済学部教授の下、上田隆穂経済学部教授と筆者であった。

#### b) 第14回 GONGOA 2009

2009年8月1日から17日までバン・フェイヒンラートナイ村(白カレン族)で簡易水道用貯水槽3基建設、フォレスト・カレンダー森林環境教育プロジェクト、樹木の植栽試験・樹種選抜試験プロジェクト、森林農業生産保管・加工(主に茶葉)用兼共同集会用の屋社建設、換金性果実樹木・換金性根茎樹木の苗木移植(タケ、パーム、バナナなど)、村落への接近道路普請、及び熱帯養蜂農業導入プロジェクトに対するフォローアップ作業を行った。山村滞在期間は8月2日から13日、引率教員は川嶋辰彦経済学部教授の下、上田隆穂経済学部教授と紙谷雅子法学部教授と筆者であった。

#### 2 GGGプロジェクト(学習院グリーン元気プロジェクト: Gakushuin Green Genki Project) 関連

#### a) 学習院元気グリーンプロジェクト2009

学習院の校威発揚のための学校法人学習院教育企画事業である。

学生の自己啓発、生きる力の創生、達成感、連帯感など人間性の高揚、現地住民との交流、ボランティア活動の体験と社会貢献を目的として、世界遺産登録を目指していた小笠原列島父島でサイクリング活動、戦争遺物の視察訪問、南島の視察などを行った他、外来種グリーンアノール(トカゲ)の駆除、ウミガメのプールの清掃、卵の穴埋め、ウミガメの放流などのボランティア活動を8月14日から23日まで9泊10日で実施した。引率教員は上田隆穂経済学部教授の下、筆者を含む3名、計4名、参加学生20余名であった。

#### b) 学習院元気グリーンプロジェクト2010

#### c) 学習院元気グリーンプロジェクト2011

学生の自己啓発、生きる力の創生、達成感、連帯感など人間性の高揚、現地学生との国際交流、ボランティア活動の体験と国際貢献を目的として、中華人民共和国内モンゴル自治区でボランティア活動とサイクリング、地元学生との交流を2週間にわたって実施した。ボランティア活動は通遼近効ナイマン旗郊外の砂地での地元農家と協力を仰いでの換金植物サジーと松の苗木の植林、学生交



流は通遼の内モンゴル民族大学、フフホトの内モンゴル大学と行った。サイクリングはフフホトを起点に250kmほどをホームステイ、ゲルでの宿泊をしながら4泊5日のツアー形式で実施した。2010年は盧溝橋、2011年は南京大虐殺記念館の訪問、残留日本人孤児の体験談の聴講なども行った。2010年は8月7日から23日、2011年は8月8日から22日までの間実施した。引率教員は引率教員は上田隆穂経済学部教授の下、筆者を含む3名、計4名、参加学生はそれぞれ30余名であった。

### 3 学習院大学東日本大震災復興支援ボランティア活動2011

2011年7月17日から23日まで学習院企画として大学生を募集して東日本大震災復興支援ボランティア活動を、岩手県久慈市を中心に野田村、宮古市で学生65名を引率して実施した。自己完結型の活動を目指し、宿泊は岩手山地の奥の平庭山荘での自炊、交通手段は東京からの往復、被災地への通いもチャーターして行った。久慈市では文化施設の水族館の清掃、公園での植林、瓦礫の撤去、野田村、宮古市では避難所でのアロマハンドセラピー、炊き出し、瓦礫の撤去などを行った。引率教員は筆者を含む5名、教職員スタッフ4名であった。

#### [補追]

この論文の一部は学習院大学計算機センター戦略事業「野外教育推進のための授業紹介 Web教材の作成ー生きる力の創生を目指した野外3授業(サイクリング・キャンプ・アウトドアスポーツ)の推進教材作成ー」の報告書(筆者著)に加筆して引用した。

#### 参考文献

- ・江橋慎四郎編、吉永宏英著、他：「野外教育の理論と実際」、杏林書院、1997
- ・J. Smith et. : Outdoor Education. Prentice Hall, 1963
- ・学習院元気プロジェクト2008 編集委員会：「学習院元気プロジェクト2008「サハリン」報告書」、2008
- ・佐藤陽治、上岡洋晴、岡田真平：「大学生に対する温泉施設での短期・集中的な健康教育の有効性に関するパイロット研究ー健康及び行動変容に及ぼす影響について」、がん予防等健康科学総合研究事業(H15-がん予防-048)温泉利用と生活・運動指導を組み合わせた総合的健康教育に関する実証的研究平成15年度総括・分担研究報告、p.36-54、平成16(2004)年3月31日
- ・佐藤陽治、上岡洋晴、他：「大学生の健康に与える集中総合型健康教育の介入効果に関する研究」、学習院大学スポーツ・健康科学センター紀要(ISSN 1344-7521)第13号、p.31-46、平成17(2005)年、3月
- ・学習院グリーン元気プロジェクト2009 編集委員会：「Gakushuin Green Genki Project 2009 小笠原報告書」、2009
- ・学習院グリーン元気プロジェクト2010 編集委員会：「Gakushuin Green Genki Project 2010 内モンゴル報告書」、2010
- ・学習院グリーン元気プロジェクト2011 編集委員会：「Gakushuin Green Genki Project 2011 内モンゴル報告書」、2011
- ・GONGOVA プログラム・ユニット(学習院大学経済学部川嶋辰彦研究室内)：「GONGOVA 2010 実績報告書、p.106、2011.3